

氏 名	島田 由紀子			
学 位 の 種 類	博士（ヒューマン・ケア科学）			
学 位 記 番 号	博甲第 9579 号			
学位授与年月	令和 2 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科			
学 位 論 文 題 目	幼児の造形表現における性差の特徴			
主 査	筑波大学教授	教育学博士	徳田克己	
副 査	筑波大学准教授	博士（医学）	森田展彰	
副 査	筑波大学准教授	博士（学術）	水野智美	
副 査	東京家政大学教授	博士（学校教育学）	大澤 力	

論文の内容の要旨

島田由紀子氏の博士学位論文は、これまで幼児の造形表現が年齢を指標とした研究が中心であったことから、取り上げられることがほとんどなかった造形表現の性差の特徴を明らかにするために、幼児の自由画について詳細に検討したものである。その要旨は以下の通りである。

第1章で著者は、本論文の研究背景として、幼児の造形表現に関する国外、国内における描画や造形表現に関する先行研究を概観し、これまで年齢を指標とした研究が主であったことを指摘している。また、性分化疾患のある幼児の造形表現に関する先行研究や保育・幼児教育における性差に関する先行研究から、幼児の遊びや表現には性差が顕在化している過程であることがとらえることができるが、保育者は幼児の性差の特徴について把握していないことが多いことが確認された。保育者が幼児の資質・能力を育むためには、幼児の性差の特徴を理解し、性差に応じた活動のねらいや内容を考え、保育活動を展開し、指導を行うことが重要であることから、幼児の造形表現の性差の特徴を明らかにすることを目的としている。

第2章から第4章では、2014年12月から2015年3月に収集した、茨城県及び東京都の幼稚園2園と保育所8園の計10園に通う、4歳と5歳の男児154名、女児148名、計302名の描いた自由画を分析の対象としている。

第2章で著者は、自由画で使用された使用色数や使用量を把握するために、画像編集ソフト photoshop を用いて色を抽出している。使用色数は男児よりも女児の方が多く、使用量については、4歳では男児は女児よりも「赤」の使用量が多く、女児は男児よりも「肌色」「茶色」「ピンク」の使用が多いことが確認されている。5歳では、女児が男児よりも「ピンク」「肌色」「茶色」「黒」が多いことが確認されている。女児は男児よりも描画の際の色彩のぬり分けや彩色の工夫がみられること、色彩への関心の高さがうかがえることから、男児よりも女児の方が、使用色数が多くなることが考えられるとしている。環境や文化的背景にかかわらず、色の好みには性差があることや、持ち物や身に着けるものの色が男児の多くは青、女児の多くはピンクであることが、自由画に使用される色彩の性差に影響していると指摘している。

第3章で著者は、自由画に描かれたモチーフを「自然（木、海、太陽など）」「花」「ひと」「キャラクター」「生き物」「家」「乗り物」「装飾」「その他」「不明」の10カテゴリに分類し検討して

いる。4歳では女兒が男児よりも「自然(花以外)」「装飾」が多く、男児は女兒よりも「不明」が多いこと、また、5歳では男児が女兒よりも「乗り物」「不明」が多く、女兒は男児よりも「ひと」「装飾」「生き物」「花」が多いことが確認されている。さらに新生児を対象にした知覚の先行研究と本研究の結果からでは、男児は「車」を、女兒は「ひとの顔」を見る時間が長いという報告があることから、新生児期から、興味や関心のあるものには性差があり、それが幼児期の自由画のモチーフにも表れていると述べている。

第4章で著者は、自由画の構図を「描画表現の特徴」と「描いた位置」の2つの構図の種別から分析を行っている。「描画表現の特徴」では、4歳、5歳ともに、女兒は男児よりも「横並び型並列表現」が多く、男児は女兒よりも「その他」が多いこと、5歳では男児は女兒よりも「バランスの取れた」「その他」が多いことを確認している。5歳では男児は女兒よりも「バランスの取れた」構図が多いことが確認されたことから、男児は女兒よりも画用紙の形を考えて描き、「バランスの取れた」構図で描いていると述べている。

第5章で著者は、第2章から第4章で分析の対象とした302枚の自由画について、幼児の造形教育の4名の研究者の評定によって自由画の構成要素にみられる性差の特徴について分析を行っている。技術面では、4歳、5歳ともに女兒の方が男児よりも高く評価され、創造性では「着想」において女兒が男児よりも高い評価であり、「主題」はどちらの学年も女兒が男児よりも高く評価されていたと報告している。女兒は男児よりも描きたいものが明確なことや、描画発達も女兒は男児よりも早く、描きたいものや事柄にふさわしい表現方法・技術を用いて描いていることが考えられている、また男児は7つの項目のうち「自由」の評価が最も高いことから、描きたいことを「自由」に表現していることが考えられると指摘している。

第6章で著者は、家庭における幼児の描画に関する保護者への質問紙調査によって、家庭での描画遊びや幼児の性差に関する考えなどについて把握することを試みている。保護者の描画の教え方について尋ねたところ、男児に対しては「手本を描いてみせる」「何もいわない」「色のぬり方を教える」、女兒に対しては「何もいわない」「手本を描いてみせる」「色のぬり方を教える」の順に回答が多いことを報告している。描画の際、保護者の言葉がけについては、対象児の性別にかかわらず「好きなように」「何もいわない」が共通して上位であり、少数だが男児に対する「大きく」「かつこよく」、女兒には「かわいらしく」という回答もみられたと述べている。

第7章で著者は、総合考察として、本研究での成果をふまえ、自由画の色彩、モチーフ、構図には性差があること、描画指導の観点による自由画の評定についても性差が認められたことから、幼児の造形表現には性差が明らかとなったとしている。家庭での描画の際には、保護者の対象児の性別による言葉がけの特徴については回答数が少ないこともあり、今後さらに検討する必要があるとしている。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、これまで幼児の造形表現が年齢を指標とした研究が中心であったことから、取り上げられることが少なかった造形表現の性差の特徴を明らかにするために、幼児の自由画について詳細に検討したものであり、独創的な研究である。特に色彩の分析方法として画像編集ソフトの **photoshop** を用いたことは、今までにない手法である。幼児の自由画の色彩、モチーフ、構図について、性差があることを明確にし、また幼児の造形教育の専門家による自由画の評定から自由画の表現にみられる性差の特徴を明らかにしている。さらに、保護者に家庭での描画遊びや幼児の性差に関する考えなどについて把握することを試みることで、幼児の性別によって家庭での描画遊びに差異があることを指摘している。

これらの結果は、今後の造形指導において意義があるものであり、幼稚園や保育所等での造形活動に活用することが期待できることから、重要な成果として認められる。以上、本論文は研究の意義、独自性、妥当性、論文のまとめ方において、博士論文としての水準に達していると判断できる。

令和2年1月14日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(ヒューマン・ケア科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。